

北
204
18

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事	明塚小栗 東漢源識校	白紙摺明朝綴 收入全部四冊
題畫詩選	岡崎盧門著	全仕立全三冊
書畫皆宜	美變氏撰輯	白紙摺明朝綴 收入全部三冊
題畫詩剛	翁川竹庵著	全仕立全三冊

北第五街
前川源七郎

四十六

北
204
18

寒燈夜話 小栗外傳附録

東都

絳山述

小栗が事人口小臆多とていとも終としてささるるなり或は小栗
判官兼氏遠州の人なり蒲野冠者頼頼の旗下さり相州小栗の
横山といふ者の女見照る姫といふ通はれ横山これと兼氏を招き
鬼麻毛と名つけられ悪馬に乗め喰殺さるる計りとも兼氏を殺し
御者あてりぬ教ともせむとて横山いづく憎り毒酒を進め兼氏を殺し
後小栗氏獲生して後次の上人よまられ能野本官の湯より本復し
相州より照る姫小栗還命横山を討て本領を安堵と爾より遠州天竺川に
居る小栗の氏を名ありの男といひ是安誕の海流なり又小栗密に
書あり。享保二十乙卯年閏板中
浪華入富山泰山と云者編 世は行われと信うに録倉大姉紙海翁友成九代記

南朝記に小栗が子を戴りて渾少く差あり何れ是れと知るに常陸國誌に
小栗が系圖あり此本の書を左も出せり。

○鎌倉大草紙巻之上応永元年癸卯春の比より常陸國の住人小栗

孫五郎平満重といふものありて謀反を起し鎌倉の山下知を脊りて間村は

退治して其動座から結城の城を占め八月二日より小栗の母を責

らる小栗あつくり軍兵數多城より外へ中防戦せんども鎌倉勢ハ一色

左近將監木戸内道今と先手の大將として吉見伊勢守上杉四郎木の荒

わたりて兩方より責入るとは結城と責降され小栗も行方ちりて行

守秘宮右馬代持綱も小栗も同意してち行方宿を陸谷後河も追ひ討ち

けし堀井下野守佐々木道は入道も是中一味の由ちて同八月八日討取れ八月

十六日結城より武州府中へは陣ある中栗今度小栗忍びて三州へは行

其子小次郎へひてり忍びて関東のありて相州將現堂といふ人あり

多れを其子の強盗とも集りて宿を借りて主のチと此等人を

常州有徳仁の福老のよと定めて随才の宝あると打殺して取へり

終合と去好が捷なる家人ともあり何せんといふ一人の盜賊も酒

香を殺せといふかと同じ宿の控女も集め今候と認めせ

小栗と此の格なりて酒をさめられ其夜敵母もちりて居ると云

遊女此の小栗よあひて此有るをいし知るやみはくも此酒を吞

ちく有るは小栗とわれを此よりさすやれ多間小栗吞ちりては酒を

さすや香さるるて家人共の是を考へ何れも酔伏てたり小栗は

物もろて林の有る物くえられ林の内は鹿毛なる馬を殺す

此馬の盗人とも海道中へ出大名往來の馬を盗すりたれども

小栗人とも馬喰儲多れが盗人とも不叶し七林の内はけさ置置り小栗を
 見せしむるも立廻り賊室おと取拵り彼馬を棄散ををり歩行を小栗を
 在双の馬ををり片附のりふ夜沢の道場馳行上人と頼りられ上人憐み
 時衆二人舟を三羽へ送られ彼毒酒を吞々体家人并狂女かく酔伏するを
 河水へ流し沈め材室と尋みり小栗とも尋みりひきどもかろりきり盗人ども
 その夜分散と散まらしれ狂女酔する所ゆりては伏されども原身酒沢
 呑まりけさ水は流れ行川下より遠のり助りり其後永吉子のと小栗
 三羽より舟を彼遊女をよび舟中待りたるをよへ盗人どもと舟中出し
 みみ誅伐しり其孫の代に三羽を居候とすり。

鎌倉管領九代紀卷之四巻永北四年五月廿四日よりを記を。

同北年五月廿八日小栗孫次郎満重退治のり左馬助持氏三千五百余騎
 下総國結城小栗向り去年八月小栗満重所領のり小栗
 分て左の段及小栗を合はみ家人善業を引つれ小栗小栗の結城の
 城をええ兵糧をこの要害を堅くし軍勢をまひり近郷をよび流れの
 小栗岩松治部を捕り現業その外上総下野の一揆系をけしお池ありり
 五六百人よ及り持氏大に憤り多し管領憲実の全軍の上校三郎方よ一千
 余騎をよび流く向られり寄手よとて城ちりかつ陣を取る処と城の兵
 退ちりさんとすりて三百余人木戸をひりて打て出りりるを山崎大助が
 軍勢二百五十騎池合てたうひり城兵散り掛まられ後なる城へしき
 ありり寄手いり勝よとておしりて城おかけりんとて城中に残る
 兵ども同時打て出て矢射をよま散りり射る寄手百餘人いりり負
 石も打れてをみるり荒手を入り責かきり皆城中へり入りり

寄手も悉く逆茂木の落すて結うけ掻楠を居る。城兵の追巻らるる
 首をいさぐれども要害きびく城をたれぬ。寄手打入ればあつても隔て
 掻楠を境ひ矢軍して日を送る。城中にれぬ寄手を屈して穴を籠りしれぬ。此
 こころおむの内のまを似たり。木戸を堅める。旧井五郎しひはあつり。寄
 寄手の結うけて物喧しや。一夜打く肝はさせんと志同し。軍
 をいさぐれひ廿七人ある。夜雨風をびり。城中より忍び出く。香河は遠く
 陣をよ火をさし。闇はけりし。さるや城中より打て出らる。寄手は
 立上と下を返す。馬よ物の具よとひり。火の子散る。陣をく。小
 つれをびり。風が吹きたれ。煙はし。火は感ひ。打消さんと防く。此
 終に敵の多少をもさる。味方の軍兵をも弁とあつる。敵と。同土
 討をいさぐ。旧井五郎もさる。小勢のさる。ゆへに七跡をき切らる。

して陣を小積置する。兵糧少く。あつる。城へ入る。寄手は
 懸く。責口をさる。げ陣をき。ひり。かき入る。用公をいさぐ。細く。後と割
 免まげ。株をさる。さる。と。美の。人か。つり。け。左。の。氏。氏。多。ひ。中。さ。る。ぬ
 る。約。千。結。お。さ。る。ぬ。寄。手。合。武。者。の。あ。り。居。る。小。城。を。責。あ。つ。る。年。月。を。守。は
 不。そ。え。さ。る。寄。手。が。武。者。の。あ。り。居。る。小。城。を。責。あ。つ。る。年。月。を。守。は
 下。野。入。道。佐。木。隊。入。道。も。一。味。手。刀。を。さ。る。これ。ら。り。後。結。あ。つ。る。

の。城。を。い。さ。ぐ。と。知。じ。く。同。舟。を。作。り。潜。つ。ま。て。せ。あ。り。の。城。を。入。り。と。す。る。如。し。
 隊。兵。天。種。を。惜。ま。さ。る。散。く。小。射。出。る。大。木。五。六。十。を。切。り。落。し。た。れ。ぬ。あ。つ。る。先。陣
 完。戸。又。四。郎。五。百。余。騎。痛。手。身。を。負。う。り。ま。る。城。中。二。百。餘。人。木。戸。を。圍。り
 突。て。出。つ。四。角。八。方。め。退。ま。る。り。し。る。村。を。さ。る。り。ま。る。大。將。左。の。改。展。の。旗。を。さ。る。

なごれりて荒年八百余結團と入勢り。二百餘人中つみす討らる戦ふ。城兵残さるる小討とて東にまきとて處ゆ。寄手あれは目も勢も木戸を引かすの逆巻木とらち倒して込けし城兵あせらるる引入れの押統て責入小を火をかけし城兵火はほら防くべからずもなす我先中と爲矣。これハ大將小栗孫次郎と家の子竹之屋と子息小次郎を討てて味と爲し。つら身ハ腹うた切く煙の中ハ臥さる。下畧。

南朝記 前二書と大同小異るる要と摘く如き。

應永二十九年常陸國人小栗孫五郎平満重打氏の命をせむはな放持氏上校と郎方小山左馬介小命と討めは。十一月廿一日小栗を城ふと合戦と。同三十二年五月廿八日徳倉の持氏小栗退治と。下総国結團の城といふ。同年八月二日小栗落城と。満重及び子孫を討てて味と爲す。

落ゆきと塩谷後河守退はけとらち取るとあり。

鎌倉志より大草紙を引く小栗がことを云へり世人の知る如く。

相州茨波の遊行寺の院中長生院といふ小栗并家人の墓あり。その院より小栗畧縁記を引く前書と異なりと雖墳墓より如縁記がれは敢て杜撰す。あつは左の如く参考の一助とて因に遊行寺の圖説をも知る。

藤澤山無量光院清浄光寺 時宗本山

本尊阿弥陀佛 座像長四尺慈覺大師の作。版権祖一遍上人身四代目。

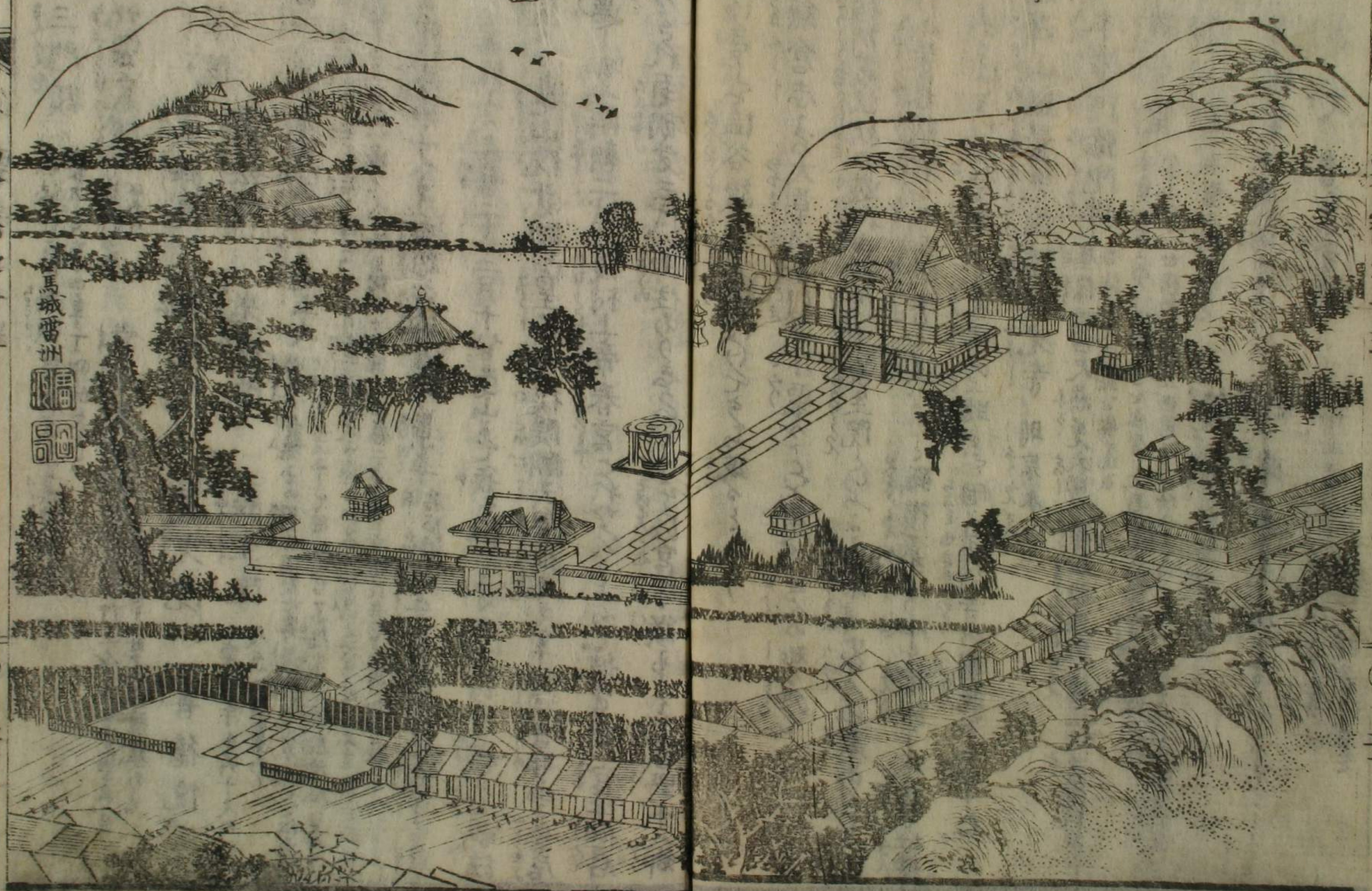
觀音堂 本堂の左あり。正観音と安置と。長き尺五寸智證大師の作。當山四十二世南門大僧正西国三十三所の土と云ふ本堂下下壁に巡礼の代と。

常行堂 本堂の側あり。鐘堂 南の門内あり。

日供堂 本堂の側あり。經藏 観音堂の側あり。

方丈 日供堂の側あり。富士見亭 方丈の上方あり。額あり。清音と書と。

藤澤山無量光院淨光寺之圖



馬城雷洲



三門額 燕山とよと勅額從二位兼承基時卿

北条家墓 南門の内 當山累世墓 同基行上人より中十三世まで并 燕山三十三世までの墳墓あり。

子院 眞淨院 栖徳院 眞光院 善徳院

眞松院 光岳院 長生院 小栗照平外十人の 及赤の墳墓あり

當山の開基の宗祖一遍上人 俗姓伊豫守の領主河井七兵衛道慶の二男初名松重寛 遍上人の母を後上峰上人より聖蓮上人よりとす。同公天台宗の僧。律師の弟子 遍上人の母を後上峰上人より聖蓮上人よりとす。同公天台宗の僧。律師の弟子

の示はす。名を一遍上人と改め徳山と回国。正應二年八月廿三日。塔及舟庫の傳あり。寂して年五十八

より四代香海上人より奉化の侯也。女弟景平。名は依紀。之の資助ありて高寺と草

創と吞海上人嘉曆二年二月十日。尚山之寂也。年六十三。才十二代の寺職を親法

院王の 龜山院才四の皇子。後醍醐天皇延元元年和洲吉野山に居

を遷し自ら南朝二代。後村上帝春宮とせられたる。彼才四の宮を徳君

とせられたる南朝才三代の即位あり。たれども。其宮方微也。吉野十八卿

尊の氏の兵威お恐れ。宮方お隨ふと。遂に才四の行八世の渡船上人の

才子と成り。延文五年より藤沢山に御在。應安二年お根津國

兵庫の津さの光るおに任職。永和三年お羽川山形光明寺お止湯。至徳二年

乙卯府一蓮するお止職。嘉慶元年二月廿六日より。海内行行し。お以時宗十

二代目と相續はし。お親上人と稱せ。徳國修行の才十四年なり。應永三年

の秋上洛まじし。百一代の帝。後小松院の朝お泰内ありて王府の右左に着せ

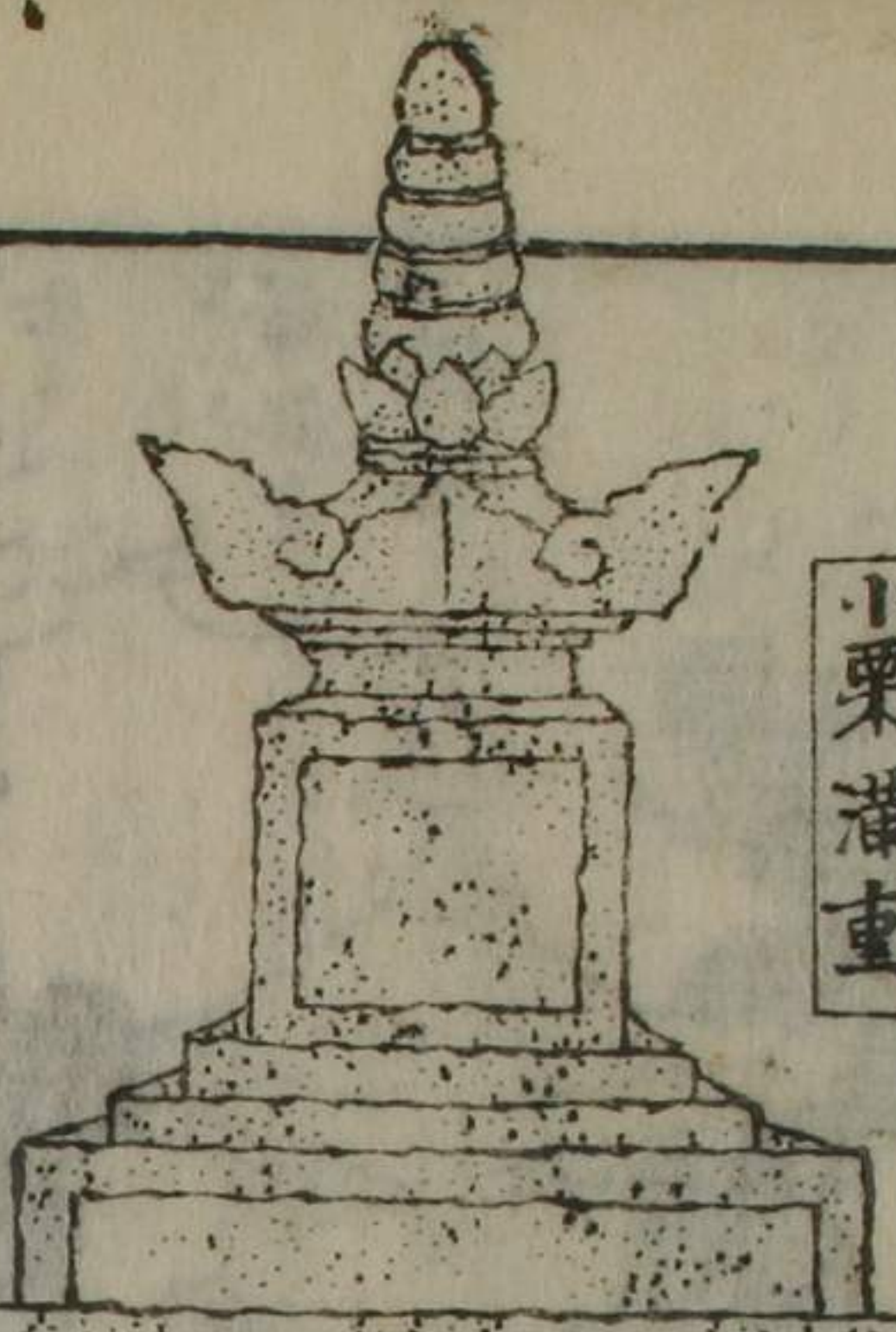
ある。南朝の五齋流なれ。後醍醐天皇の宸影。并御宸翰。硯硯小松宮

隨心院より行行。親王お授ふ。此縁由ありて行行十三世上人より

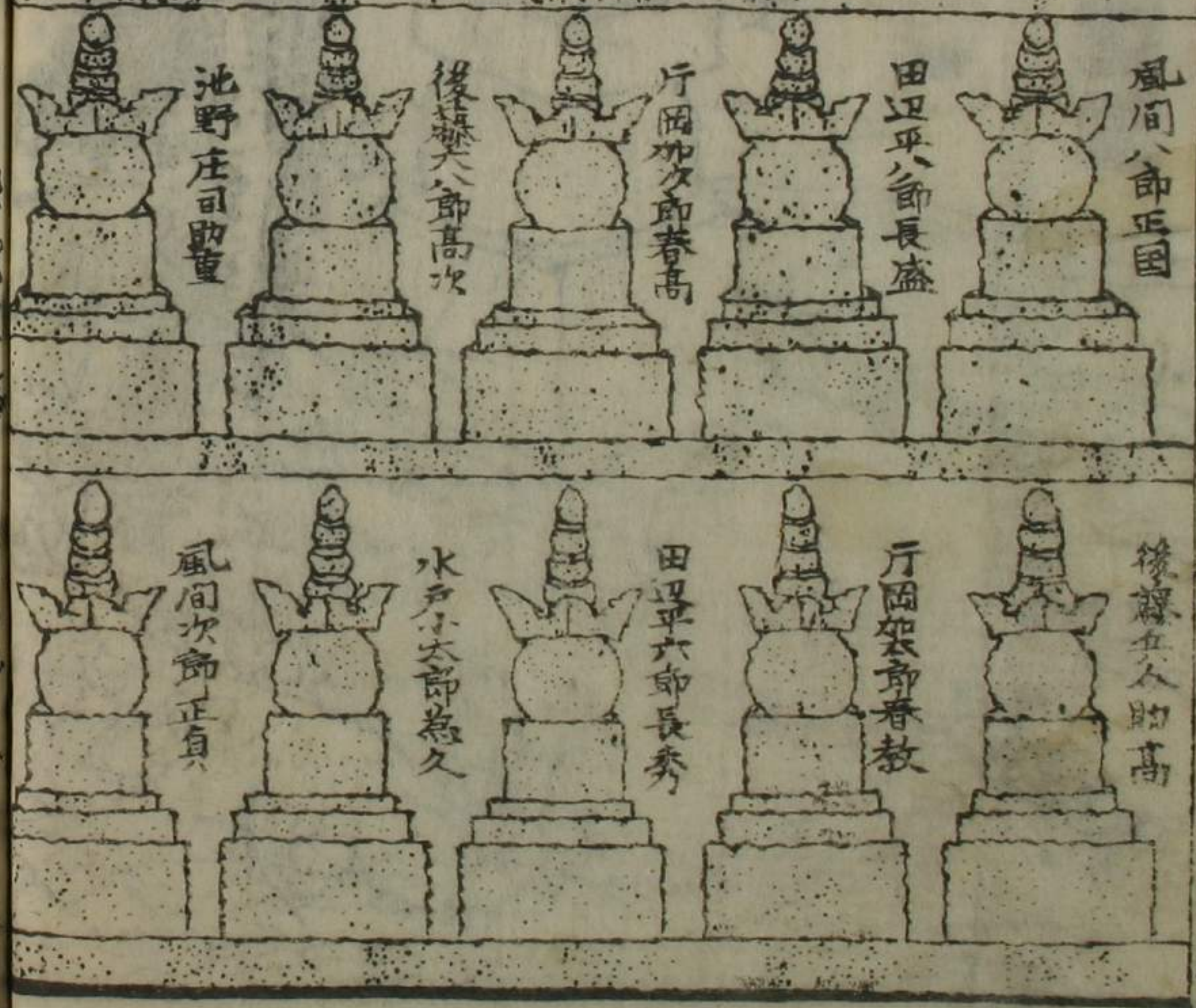
己後へ代。倫旨頂戴。泰内の格式小御所埋圓の因。之事自ら。龍顏を

拜し。おまじり。お親法親王。應永四年の夏。回国修行の。後小松院を達

敷。厚三利三代の將軍。お満之へ。勅命ありて。當代行行上人の南朝即位の



小栗満重



桓仁王百一代小松院の御宇奥の常陸國小栗城に宇孫五郎判官
 満重性ハ桓武天皇の後胤にして武臣屬一智勇兼備の士なり。應永
 の初同土流言に依て謀叛の受へ謙余を遣一官領持氏朝に征討して一色
 左近將監末戸内匠女駈向らせ教月戦めといふも満重を堅固めし一族亦
 勇を揮ふも容易ならず。加勢にして吉見伊豫守上牧四郎亦近加りたる
 心を劣戦としども終に後藤兼大郎及びね満重を降し一語密に城内を忍び出
 三河國は為行たる折も相列の士横山大膳の末末馬場存之太といふ者
 神詣の海を満重と同休し横山の鼓を渡りて然る小大膳といふりの強要し
 ちて幾人を掠り山城を業に榮耀を誇りて其女を集めり。中一照姫と
 しての妓女あり。俗に照姫と云ふ。父の北面の浪士中一子あるを欲りて
 設け子に父母亡て後放りて横山に住居たりしが満重運苗のち相續す

ようて階老の証を結びし。ゆゑ月日もまねまらぬ。大徳の徳をばして判官を
 幕下に附人と女兵の人を撰び侍り謀るといふも。漢軍は智しと謀るも
 あり。其比大膳一疋の悪馬在り。大いふ人を喰ふ由を鬼麻毛と名
 づけて後園の樹下に汲みぎ。並満重勇猛し。て従ふ。然る時彼馬は
 害せん。と漢軍は謂く。曰仁社此馬と云。はば則ち。と有り。小栗
 判官馬上の達人。ゆゑ奉り。せのふと。打ち。堅横序破急基盤の上
 まで自在なる。其術を人々譽く。感公。横山の案。相違。家。小栗判官
 美女妓女を。系竹歌奔の奥。酒宴。せ。鳩毒を以て害せん。と
 横山。徒。近。吞。各。五。痛。忽。失。死
 上野。小。捨。十。時。友。上。其。夜。官。事。曰。我
 閻王の使と。一。の。上。人。呈。其。書。披。大。日本。常。陸。小。栗。判。官
 士。拾。人。鳩。毒。の。害。せ。士。拾。人。宿。世。の。因。満。重。報。業。依。て
 獲。生。心。熊。野。の。温。泉。浴。せ。速。平。復。之。み。死。去。妻。の
 通。と。云。不。解。言。耳。拾。人。の。死。を。葬。り。後。手。を。杖。持。て。馬。を。造。り。金
 狗。札。を。付。其。文。曰。此。病人。送。熊。野。本。宮。湯。若。有。人。暫。助。引。之。者。可。勝。供。養。於
 僧。功。徳。矣。夫。より。地名。と。車。田。路。と。云。此。車。本。宮。湯。の。入。湯
 の。間。以。後。を。結。ひ。多。し。本。復。め。て。甘。菜。と。車。隊。の。下。入。捨。れ。れ。これ
 小栗判官不詳の續といふ。爰に熊姫を常と親しむと
 定稿は淫家を逃去り武明令次を捕小赴し追手の者多しと
 所賞衣類を剥奪して侍女を溺し投入して去りぬ娘類の

不正

不思議なる我六浦川村千光寺の観音光りを祀り姫が瀕死と救ひし事
 此の像を照色の姫と名づくる其比村の邊に一人の漢女あり此奇蹟を以て感歎し
 又千光の存するもいふ 宅小鏡ひびきし金小妻嫁姑徐く姫の女にるる中と傍を松枝を集め
 欲を姫一ひひ観音を念せし風犯て煙撲きぬ小蔵にて姫を身で除くこれ
 傳は丈士の靈験と云も思ふし妻怒り所を松枝を江中へ投ぐるも同境津戸の
 下り所縁を教と京都へ訪ぐるも幸有のこみより依く官に任せられ本願を安堵
 去く常例は叙く序の横山が館を尋ね大膳をとりて先毒酒を以て室に
 満きゆあれは驚き愧変きて既小逃まんとて満きゆ徒手早く翻賊すて捕
 捕共刑に然り而後沢山へ入るるかのれ上人の恩恵を謝し箇魔堂において
 報恩の爲る自病き本復の像を刻を法舎を行ひ再活の徳を拜し本願を
 賜り小栗女住せり初て照姫濃別小在りし時則呼下し謝縁を多かる満き
 その後一向三室へ飯し星霜を行く應永三十二年三月十六日病死と法名
 重巖院満阿弥陀佛と號し舎身助重領と後鎌倉小糸藤沢山へ入
 亡父并郎等拾人の碑を八徳池の辺り小建道孝謝恩の供養を箇魔堂に於
 懇小管のみまろ照姫の本より鐵土を厭ふの志流りたれば領て其難受戒て
 長生比丘尼と号し箇魔堂の傍に地蔵の像と小栗満寺の像を安置し
 朝の光を摘み夕べの燈をかかげ専修念佛怠らば永享十二年十月十四日
 西向の瑞座合掌して逝し長生院喜佛房と号し跡長生院と稱し今
 藤沢山の一方と成りぬ

相州藤澤山内
 長生院



此錢八宋の徽宗帝の崇寧元年鑄き。此之



文化土年まで七百十三年より多なり。大錢一と小錢



十小換はる。昔照手。長生院の此錢あり



長生院の此錢あり

小栗横山ヶ邸にて乗。鬼鹿毛之圖



馬鞍雷州

八陵の鏡又名唐鏡

照天燈所持の鏡あり

法國ヶ谷 照姫の菴 小栗墓 十騎塚 鬼鹿毛之圖 八徳水 横山屋鋪 珍賀臺 上野原 引地原 車田町

上小書せ十一名を長生院の圖上小ありしと紙中挾が故ふくふ出しぬ



馬城雷洲



相州遊行寺
寺内

常陸國志云小栗氏地在真壁初國人相傳小栗判官兼

家宅也按小栗氏は重成歟說見左兒女子所傳小栗

說經書曰小栗判官兼家常陸國人也聞相摸國人橫

山氏有美女名日照手國色有文遠寄書以挑女喜而

許配兼家直趣橫山家乞為婚橫山惡其強暴鳩殺之

兼家死入冥府見閻羅王王察其無罪放還兼家蘇生

云荒唐可笑考旧記小栗氏世系東鑑湘山屋移集

陸國大椽多氣繁幹第四男曰重義食邑真壁郡小栗

地為小栗氏重義子曰重成號十郎筮仕源賴朝治美

四年源賴朝討佐竹飯路趣重成宅重成饗賴朝壽永

四年源賴朝討佐竹飯路趣重成宅重成饗賴朝壽永

九年信太義廣有自立之志誘引諸国武士常陸国武士多属義廣重成孤立不服而頼朝遣結城小山徒攻之重成有戰功三年頼朝遣二弟滅木曾義仲於京師攻平宗盛於南海西海重成皆有戰功文治五年頼朝自將伐奥州重成先登泰衡敗北頼朝入平泉館是即泰衡宅也館屋罹災為焦土唯一庫存頼朝遺葛西清重小栗重成開庫点檢有水沈紫租厨司藏牛犀角象牙笛水牛角紺瑠璃笏金鬘玉幡金髮蜀江錦帷金鶴銀瑠璃燈籠南廷百錦繡綾羅等種々珍宝頼朝以錦帷牙笛賜清重以玉幡華鬘賜重成為潤色氏寺而

此物云建久四年五月與伊佐為宗受頼朝旨修造鹿島神社經歲月功不就頼朝怒命八田知家役功七月發狂疾自称神託多吐謔言初重成以玉幡金華鬘為氏寺飾自後每夜夢有山臥僧數輩來覆重成枕頭乞玉幡重成心甚惡之終發狂疾重成從者馳取告梶原景時入告頼朝頼朝命馬場資幹代重成監修造事重成子曰重信號二郎建仁三年北条義時矯宗朝命擊殺畠山重保於鶴岡麓重信先登寛元五年夏北

条時頼滅三浦泰村常陸国武士関政泰救三浦氏不克自死於法華堂時頼命重信襲関政泰宅關氏家臣

與重信戰関氏敗走重信縱火焚関氏館重信子曰朝
重號弥二郎朝重後食邑於小栗地應永年中足利滿
隆逐持氏小栗氏為滿隆黨及持氏就位常例小栗氏
族皆戰死遂絶後嗣云云

右中出所也他小栗が傳と誌との東艦湘山星移集澹念年中行事
記本の書あり大同小異也此の事記さるるは是と漏るは他
書小栗の傳を裁るののりや否世俗云傳小栗判官が右中出せ
諸書の説を混ト合して云々也

小栗外傳附録畢

北郎芳

軍書小説類藏板目錄

大坂心齋橋通
北久寶寺町

河内屋源七郎

楠二代軍物語

平かな
繪入

五冊

繪本雪鏡談

春曉齋作
同前

十冊

楠正行戦功圖繪

本儀

十冊

同金花談

春曉齋作
并画

十冊

楠公正行公上成卿の遺部を守り南帝の所
為す事なり傳奇兵とて敵と戦ふ美談也

同孝感傳

同前

十冊

神功三韓退治圖繪

皇太后

五冊

同龜山話

同前

十冊

國史實錄の上古の事ハ詳ニシテ其ノ後ハ
容儀ノ寫也 ぬれハ思ハルノ目トモハ
歎ク者ナリ且ノ事實ヲ傳ヘテ作者ノ事
業ヲ述ベテ其ノ意匠ヲ示スル也

同顯勇録

同前

十冊

同忠孝三見浦

同前

十冊

九州諸將軍記

十二冊

同月宵鄙物語

真積作

十冊

復讐言山石見英雄録 初編 七冊

同 二編 七冊

同 三編 七冊

復讐言山石見英雄録 第四輯 七冊

同 二編 七冊

同 三編 七冊

同 四編 七冊

同 五編 七冊

同 六編 七冊

同 七編 七冊

繪本誠忠傳 十冊

同 合邦辻 十冊

同 若茅草紙 十冊

同 淺草靈驗記 十冊

同 忠孝美善録 十冊

同 彦山靈驗記 十冊

同 寫英勇記 十冊

同 金毘羅神靈記 十冊

同 小栗外傳 十冊

同 繪本忠臣藏 十冊

新累解脫物語 五冊

同 中編 五冊

同 後編 五冊

昔語眞屋庫 五冊

同 中編 五冊

同 後編 五冊

朝比奈巡嶋記 卅冊

同 七編 五冊

同 八編 五冊

同 九編 五冊

繪本誠忠傳 十冊

同 合邦辻 十冊

同 若茅草紙 十冊

同 淺草靈驗記 十冊

同 忠孝美善録 十冊

同 彦山靈驗記 十冊

同 寫英勇記 十冊

同 金毘羅神靈記 十冊

同 小栗外傳 十冊

同 繪本忠臣藏 十冊

小栗外傳 十冊

繪本忠臣藏 十冊

同 後編 十冊

同 拾遺 十冊

同 西遊全傳 十冊

同 二編 十冊

同 三編 十冊

同 四編 十冊

同 五編 十冊

同 六編 十冊

同 七編 十冊

同 八編 十冊

集燭譚談

大傳

復讎言物 櫻枝亭 詩書 七冊
 紙治 楮生談 五冊
 同 安達ヶ原 一冊
 見外白字當利 五冊
 通俗亞山夢 五冊
 貧福太平記 三冊

繪本之夜松譚 六冊
 孝子嫩物語 蘭山作
 金花夕映 梅春里谷 北嵩 五冊
 月冰奇縁 同前
 石言遺郷音 同前 暗齋北馬画 五冊
 同 奈古曾の關 五冊
 同 平泉實記 十二冊
 同 魁草紙 二冊

繪本之夜松譚 六冊
 孝子嫩物語 蘭山作
 金花夕映 梅春里谷 北嵩 五冊
 月冰奇縁 同前
 石言遺郷音 同前 暗齋北馬画 五冊
 同 奈古曾の關 五冊
 同 平泉實記 十二冊
 同 魁草紙 二冊

新田足利 外名將の評論 八帝の傳
 各級の物語 論及法園
 俗説 龍鏡 論及法園
 貧福太平記 三冊

繪本之夜松譚 六冊
 孝子嫩物語 蘭山作
 金花夕映 梅春里谷 北嵩 五冊
 月冰奇縁 同前
 石言遺郷音 同前 暗齋北馬画 五冊
 同 奈古曾の關 五冊
 同 平泉實記 十二冊
 同 魁草紙 二冊

